

〇〇先生へ

先日の研究大会 お疲れ様でした。

さて、先生から次のような話を伺ったことを思い出しました。

「学びの共同体に取り組んでいる。随分とできるようになってきた。全国学調でも成果が出てきた。しかし、3年生になると、初歩的なところでつまずき、班の子に聞きづらいと思っている子がいる。班の子ができるまで待っており、暇になったところを見計らって聞いているとのこと。1・2年生の頃は普通に聞いていたようだ。そうであったとしても、一斉授業であるならば、その子は机に伏せていることが十分に予想できる。」

以前、小学校4年生の担任に、「分からないことがあったら、班の子に聞くということができてきましたか？」と尋ねたことがあります。「九九がまだ完全に覚えていない子がいるので、その子へは教師が対応しています。」という答えが返ってきました。「本校では以前から分からないことがあれば辞書で引くことを指導し、子どもたちは自分の辞書をいつも手元に置いています。とても良いことだと思っています。また、これとは別に、“分からなければ辞書を引く”というのが私の口癖です。九九が分からなければ九九表で調べればよい。九九表をその子に持たせればよい。教師が準備してやり、いつもその子の机の中に入れさせておき、必要の応じて自分で調べればよい。何度も何度も自分で九九表を使って調べることで自然と覚えていくのではないかな。個に応じた支援であり、個に応じた環境づくりです。」と言ったことがあります。

この中学生も同様だと思います。この子は「九九」が完璧でないとも伺いました。基礎的基本的なことで、この子が聞きづらいと感じている内容を確認し、一覧表にして持たせることは、学び方を教えるとか、生活の仕方を教えるとかいったことにつながるのではないのでしょうか。彼の困り感の実態は私には分かりませんが、本人と話し合っって取り組んでみる価値はあると思います。

勝手なことを言って申し訳ありませんでした。最後まで読んでいただきありがとうございました。

8月29日

〇 〇 〇 〇